

## 祈りの分類

袋本 久美子 関西大学大学院心理学研究科

阿部 晋 吾 関西大学社会学部

### Classification of Prayer

Kumiko FUKUROMOTO (Graduate School of Psychology, Kansai University)

Shingo ABE (Faculty of Sociology, Kansai University)

Studies on prayer have identified different types of prayer and a compendium of them. However, these studies on the classification of prayer have differed in their classification criteria and methods. Consequently, the various classifications have been mixed, and research has been conducted without any consistency of the general types of prayer and the characteristics of each type. Therefore, we organized and compared studies focusing on the classification of prayer content. Thus, prayers of petition were identified in all classifications. The commonalities and differences among the each of classification were also clarified, which may contribute to promoting of the clarification of the psychological effects and mechanisms of prayer.

**Keywords:** classification of prayer, types of prayer, prayer of petition

#### はじめに

祈りは宗教の中核的行為であり (Heiler, 1918), 宗教者にとって一般的で重要な習慣であるとされてきた。しかし近年, 日本では約 76% が宗教の重要性を感じていないことが明らかとなり, さらに, 宗教的行事への参加頻度については, 月に 1 回以上参加していると回答した回答者は 12% であることが示された (Haerper et al., 2022)。これは, 日本に限ったことではない。世界的に宗教的信仰心が薄れ, 宗教者数は減少し, 宗教が人生の支えや意味の源泉として必要でないと考える人が増加している (Inglehart, 2021)。その一方で, 冠婚葬祭を省いて祈ることがある人は, 日本では 83%, 世界では約 79% の人々が祈っていることが示されている (Haerper et al., 2022)。実際, 祈りは一般の人々においても問題がより深刻

で慢性的であるとき, 他の治療法などでは対処できない場合に利用されやすく (McCullough & Larson, 1999), 一過性のストレスにも利用されていることが明らかである (Selim, 2001)。したがって, 祈りは, 宗教者に限らず人口の大部分にとって, 日常的に実践されている重要な行為であるといえる。

Kevin & Glen (2007) は, 祈りの歴史や人々の祈る行動がほとんど変化していないことを踏まえると, 今後も祈りの実践は広く維持され, 人々の間に浸透している祈りに基づいて祈りの研究を進めることが必要であると指摘している。これまで, 祈りの科学的研究は欧米主導で行われ, ほとんどの祈りの研究がキリスト教文脈で進められてきた。しかし, 人口の半数以上がキリスト教信者であり, 強い宗教心を持っている国として長い間例に挙げられてきた米国でさえ, 近年では, 宗教離れが進んでいる (Inglehart,

2020)。そのため、特定の宗教教団における祈りを基準にして考えることから離れ、現状の祈りの実態に即して、個人の祈りを対象にすることが求められている。重要なことは、個人の祈りを対象にすることによって明らかとなるさまざまな祈りの側面や祈りのタイプを区別することである。実際、祈りにはいくつかのタイプがあり、有益な祈りもあればそうでない祈りもあることが指摘されている (Brandon, 2007; Whittington & Scher, 2010)。ほとんどの祈りの研究は、特定の祈りの側面や内容に注目することなく、祈りの頻度に焦点を当てている (Newman et al., 2023)。一般的に、祈りの頻度は単一の項目から構成されているために、祈りの多次元性を捉えることが困難である。

そこで、祈りの頻度以外から祈りの個人差を検討するために、さまざまな祈りが分類されてきた。これらの祈りの分類は、研究者により分類の基準が異なっている。例えば、分類のための質問項目が異なる、神の存在を前提とした分類であるということが挙げられる。したがって、分類の結果にも違いが生じ、一貫した祈りの分類は示されていない。Ladd & Spilka (2002) は、多様な祈りのタイプに関して、それらを結びつける理論がなく混乱していることから、いくつかの祈りの分類研究を比較した。しかし、分類に焦点が当てられているため、それぞれの研究の方法論や特徴などについては述べられていない。各研究の類似性や差異性に着目することで、対象者や方法論の違いを超えて一貫して実践されている祈りのタイプや祈りの分類研究の問題点などを明確にすることができる。特定の祈りのタイプがポジティブまたはネガティブな効果につながることから、各研究の特徴や方法論を整理し明らかにすることは、祈りの心理的効果やメカニズムの解明を促進するためにも重要である。そこで、とくに分類の基準として利用される祈りの内容に着目し、祈りの内容を分類することに焦点を当てた研究を整理する。また、それぞれの研究の類似性や差異性を比較することを目的とする。なお、以下で示す研究は、Newman et al. (2023) を参考に祈りの内容を分類した研究として扱った。

### 祈りの内容の分類

祈りの研究で広く使用されるようになった最初の分類法としては、Poloma & Pendleton (1989, 1991)

による祈りの分類が挙げられる (Newman et al., 2023)。この研究では、祈りのタイプが QOL に与える影響について明らかにするために、宗教性および幸福感を測定する項目が設定された。宗教性の測定には、主観的な指標と客観的な指標の両方が含まれる。前者は、祈りにおける宗教的体験と宗教的満足度の2つの指標から、後者は祈りの頻度から構成されている。とくに祈りに関する項目として、祈りにおける宗教的体験を構成する質問項目は、祈りの最中に神の存在を強く感じたか、霊的または聖書の真理について、より深い洞察が得られたと思われるものを受け取ったかなどの計5項目からなる。また、祈りの頻度の質問項目は、1年間に教会の礼拝以外で祈った回数、礼拝や食前の恵みの回数の2項目からなる。加えて、祈りのタイプに関する質問が15項目設けられ、そのうち11項目は God や Bible の文脈で作成されている。これらの項目の出現頻度に焦点が当てられた。

因子分析の結果、祈りのタイプは瞑想的な祈り、儀式的な祈り、請願的な祈り、口語的な祈りの4つに分類されることが明らかとなった。瞑想的な祈りには、神や聖書について考える、神の語りに耳を傾けるなど神との親密さと個人的関係の構成要素が含まれる。儀式的な祈りは、聖書を読む、祈りを暗唱する頻度などから構成され、嘆願的な祈りは、物質的なものを神に願う頻度から構成されていた。口語的な祈りは、意思決定の際に神に導きを求める、神の恵みに感謝する、神との対話や罪の赦し、世界の平和を願う、神を愛している時間を費やす頻度などさまざまな概念から構成されていた。なお、これらの祈りのタイプは、Heiler (1958) と Pratt (1930) による理論的分類法から転用された。

McKinney & McKinney (1999) は、キリスト教の多くの宗派で一般的な4種の祈りを明らかにした。後期青少年の祈りの特徴を検討するために、大学生を対象に、祈りの活動に関して7日間日記をつけるように求め、半構造化インタビューとアンケート調査を実施した。対象者77名のうち、56名がキリスト教信者であった。日記には、祈りに関するすべての考えや行動、祈る前、祈っている最中、祈った後の感情、時間や場所、祈りを実践した人数、誰に対して祈ったかと祈った理由を記録するよう指示された。また、インタビュー調査では、信仰している宗教へのコミットメントや祈りの頻度、祈る場所、祈

りが答えられたと感じるかどうかについて尋ねられた。祈りに関するアンケートでは、信仰している宗教、両親の宗教、宗教へのこだわり、教会への出席頻度と理由、祈りの種類（嘆願の祈り、告白の祈り、感謝の祈り、崇拝の祈り）について回答を求めた。

分析の結果、学生が実践している祈りには嘆願の祈り、告白の祈り、感謝の祈り、崇拝の祈りに加えて、単純なコミュニケーションとしての祈りとリラックスとしての祈りが含まれることが示された。しかし、最初の4つの祈りのタイプでは平均値がより均等に分かれることが明らかとなり、これらの頭文字をとってACTSと名付けた。嘆願の祈りは、自分自身に対する個人的な行為を求めるものであり、現在の不足と充足への願いを表し、感謝の祈りは、過去に与えられたものから現在起こっていること、未来のことに対する祈りであり、自分のための祈りもあるが他者や平和を願う祈りが含まれる。崇拝の祈りは、現在に根差しており、嘆願を伴うことはほとんどなく、自分の人生との中で神が果たすと想定される役割に対する満足感の発露である。告白の祈りは、神との関係が傷つき、修復が必要であることを表していた。このように、本研究では、祈りのタイプによって肯定的または否定的な特徴があることが明らかとなった。これらの祈りのタイプでは、その内容が過去に与えられたことに対するもの、あるいは現在起こっていることに対するものといったように時間的視点が異なることが見出された。

研究者たちは、これらの分類に新たな次元を追加していった。Laird et al. (2004) は、祈りは多次元的な構成要素であることから、明確に個人の祈りのタイプを測定できる分類法を開発するためにMultidimensional Prayer Inventory (MPI) を提案した。McKinney & McKinney (1999) によるACTS分類法に加えて、神の知恵や理解、導きを積極的に待ち望む受容的な祈りを含む祈りのタイプを設定したアンケート調査が実施された。対象者は、314名の学部生で、79%がプロテスタントかカトリックであり、ふだんから祈っていない人も対象に行われた。

MPIは、祈りの量的側面（祈りの頻度や持続時間）と質的側面（5つの祈りのタイプや祈りの効果に対する確信、宗教的所属）から構成された尺度である。祈りの頻度の項目には、1週間のうち祈った頻度、実践した時間、1日のうちに祈った時間が含まれる。5つの祈りのタイプに関する質問項目は、神に具体的

なことを要求した、神に感謝した、神を崇拝、賛美した、自分の不適切な点を告白したなど計18項目から構成されていた。なお、神という部分は、強い力を感じるといったように別のワードに置き換えて回答することも可能であることが示されている。祈りの効果に関する項目は、祈りが自分の人生に影響を与えている、自分の祈りが他の人々の人生に影響を与えていると信じているの2項目であった。所属宗教については、キリスト教やユダヤ教の各宗派、仏教やヒンズー教、無神論なども含む項目で構成されていた。項目分析および因子分析の結果、信頼性・妥当性が認められ、予測されたMPIの5つの祈りのタイプが実証的に確認された。

これらの分類では、類似する祈りのタイプが存在する一方で、見出された祈りのタイプや分類数などの結果が異なる部分もあり、すべての祈りの分類で同じ祈りのタイプを測定することは困難である。Ladd & Spilka (2002) は、このように祈りの分類に一貫性がないことから上述の研究者を含む6人の研究者 (David, Ladd & Spilka 1991; Hood, Morris & Harvey, 1993; Ladd et al., 1995; Laird, 1991; McKinney & McKinney, 1999) による祈りの分類を簡潔にまとめ比較した。

まずLaird (1991; Laird et al., 2001) は、先行研究から5つの祈りのタイプ（崇拝、告白、感謝、嘆願、受容）に焦点を当て、それぞれの祈りのタイプに関する計15の質問項目から構成された尺度を作成した。Hood et al. (1993) は、32項目（例えば、祈るときに自分のために物質的なものを求めるか）からなる尺度の回答結果から、物質主義的な祈り、嘆願の祈り、典礼的な祈り、瞑想的な祈りの4つの祈りのタイプに分類した。物質主義的な祈りとは、祈りの中で物質的なことを求める祈りであり、典礼的な祈りは、儀式や儀礼を伴う祈りのことである。David et al. (1991) やLadd et al. (1995) は、6つの祈りのタイプ（告白の祈り、物質主義的な祈り、儀式的な祈り、瞑想的な祈り、習慣的な祈り、慈悲深い嘆願の祈り）を明らかにする28項目から構成された尺度を開発した。

これらの研究を整理した結果、各研究で示された祈りのタイプは異なる言葉を用いて分類が示されていても、密接に関連する概念を含んでいる場合があり、重複している可能性が示唆された。その一方で、それぞれの分類に複数の概念が含まれている、発生

頻度や一致の強さなど分析のレベルが異なるといった問題があるために、整合性をとることが困難であることも明らかにされた。

### その他の祈りの分類

Ladd & Spilka (2002) は、上述の研究にはさまざまな概念が混在していることを指摘し、新たに認知的側面に焦点を当て、祈りの方向性を明らかにした。先行研究で提唱された理論に基づき、「内向きの祈り」「外向きの祈り」「上向きの祈り」の3つの方向性を祈りの認知的側面に適用した。「内向きの祈り」は自己とのつながりを、「外向きの祈り」は人と人とのつながりを、「上向きの祈り」は人と神とのつながりを表している。それぞれの主要な要素やこれら3つの祈りの関係性を明らかにするためにアンケート調査が行われた。対象者は、368名の学部生で、43%がプロテスタント、31%がカトリックと大半がキリスト教信者であった。また、対象者のうち49%が月に1回以上宗教行事に参加し、51%が週に1回以上祈っていることが報告された。

祈りの認知的側面に関連する項目を作成するために、先行研究から単語やフレーズを抜き出し、計153項目が得られた。対象者は、各項目が祈りをしているときの自分の思考とどの程度関連しているかを評価した。因子分析の結果、8因子が確認された。各因子は、「自分について考える祈り」や「物質的・物理的なものを求める祈り」、「涙の祈り（悲しみや嘆きを表現する認知的な祈りの活動）」などこれまでの祈りの分類研究で確認された祈りの側面と同じ、もしくは異なる祈りの側面が見出された。また、固有値とスクリープロットを確認した結果、第1因子では執り成し（外向き：他の人のための祈り）と苦しみ（外向き：他の人と痛みを分かち合う祈り）、自分について考える（内向き：自分の霊的状态を評価する祈り）が確認され、第2因子は休息の祈り（上向き：静寂を求める）と聖餐（上向き：伝統的な行為）、涙の祈り（内向き：個人的な動揺を経験すること）を包含していた。第3因子は、祈りに対する自己主張的なアプローチと請願的なアプローチによって示された。したがって3つの因子は、明確に内向きの祈り、外向きの祈り、上向きの祈りを区分しなかった。しかし、本研究は、祈りの認知的形態と祈りの内容の関連性を実証的に特定することに寄与した。

袋本・阿部 (2023) は、さまざまな祈りのタイプ

に共通する祈りの構成要素である祈りの言葉の語尾（以下、祈りの言葉と略す）に着目した。実際、超越的存在と祈り手による会話形式の口語的な祈りが最も多いことが分かっている (Poloma & Pendleton, 1989)。祈りの言葉の分類に加えて、異なる祈りの言葉を用いることが精神的健康にどのような影響を及ぼすかを明らかにするために、祈りの言葉とLOCの関連を検討した。対象者は、20歳以上の208名で宗教者だけでなく一般の人々も含まれた。まず祈りの言葉を検討するために、祈りに関する4つの質問項目が設定された。各項目は祈りの頻度、祈りの場面、その場面での言葉、普段の祈りの言葉から構成され、普段の祈り言葉は、先行研究から抜き出された4項目が設定された（-します=誓願、-してください=嘆願、-するので-してください=取引、-してくれてありがとうございます=感謝）。

クラスタ分析の結果、誓願と感謝の2つの祈りの言葉が高いクラスタ、4つの祈りの言葉のいずれかのみが高いクラスタ、すべてが低いクラスタの6つが確認された。また、内的統制が高い人ほど誓願の祈りを実践していることが示され、異なる祈りの言葉では、祈る場面やその場面での言葉にも異なる特徴的な傾向が見られることも明らかとなった。

Pargament et al. (2000) は、ストレスに対する宗教的対処法を包括的に評価するために、RCOPE尺度を開発した。対象者は540名の学部生で、45%がカトリック、41%がプロテスタントであり、大半の対象者がある程度の宗教的関与があることを報告していた。宗教的対処法は、先行研究で示された5つの宗教的機能により定義され、RCOPEを構成する21の下位尺度の全105項目を用いて、過去3年間に経験した最も深刻な否定的出来事に対処する際に、さまざまな宗教的対処法がどの程度関与していたかを評価させた。因子分析の結果、理論的に導かれた21の下位尺度とほぼ一致しており、尺度開発の基礎となった理論的枠組みを支持した。RCOPEには、聖職者や会員からの支援を求めるといった宗教的対処法だけでなく「執り成し」「嘆願」の特定の祈りのタイプも含まれている。したがって本研究は、個人の宗教性や宗教的経験に焦点が当てられている点において祈りを分類した研究ではないものの、宗教的対処法として祈りは用いられること、それが特定の祈りのタイプと関連していることを明らかにした。

Table 1は、上述の公刊されている研究の対象者、



Table 1 祈りの分類が行われた研究の対象者、方法、質問項目

	Poloma & Pendleton 1989	McKinney & McKinney 1999	Pargament et al 2000	Ladd & Spilka 2002	Laird et al 2004	袋本・阿部 2023
対象者（キリスト教信者が占める割合）		73%	86%	74%	79%	
方法	質問紙	日記・質問紙・インタビュー	質問紙	質問紙	質問紙	質問紙
祈りの質問項目（神や聖書の項目が占める割合）	76%	5%	67%		24%	0%

注) 論文に明記されていない場合は空欄とする

方法、質問項目の特徴をまとめたものである。研究時期や研究目的などの違いはあるものの、それぞれの研究の方法はアンケート調査に依る部分が多いこと、対象者の大半がキリスト教信者であることが示された。また、祈りの研究で広く使用されている Poloma & Pendleton (1989) による分類法は、質問項目の7割以上が God-bible 文脈で作成されていることが明確である。

これらの研究以外にも、理論的に祈りを分類した研究がある (Heiler, 1918; 棚次, 1998)。とくに Heiler (1918) は、世界的な規模で膨大な数の祈りを分類し、祈りの側面をきっかけと動機、内容、形式、姿勢や身振り、現象、主体、対象などに整理した。これらは、祈り手や祈りの特徴により異なることが示されている。祈りの研究で引用されることの多い祈りの内容は、呼び掛け、問い掛け、嘆願、懇願、執り成し、供犠の決まり文句、誓願、挨拶、賛美、告白、自己批判と罪の赦しの懇願、説得の手段、依存感情・確信・忍従の表明、感謝に分類されている。しかし、このような研究はデータに基づいていない点で上述の研究とは異なる。

### おわりに

すべての祈りの分類で確認された嘆願の祈りは、否定的な側面につながる事が示唆されているが (Poloma & Pendleton, 1991; McKinney, 1999)、数十年経っても利用されているという分類結果が示すように、最も利用されている祈りの可能性があり、人々を癒す側面を備えているのかもしれない。さらに嘆願の祈りは、宗教的・文化的背景にかかわらず共通する祈りのタイプの可能性がある。しかし、これらは未検討であり、嘆願の祈りの需要や祈り手に及ぼす影響を説明するためのデータは不足している。

異なる祈りの分類の中で、利用され続けている祈りのタイプを特定し、その特徴を多角的に検討していくことが祈りの心理的效果やメカニズム解明のために必要である。それまで Laird (1991) 以外で示されていた儀式的、瞑想的な祈りなどが、McKinney & McKinney (1999) からそれらの祈りのタイプが見出されず、感謝や崇拜の祈りといった分類に変化していた。これは、祈りの実態の変化によるものであるか、あるいは理論や方法論の違いによるものであるかということも明確にしなければならない。また、袋本・阿部 (2023) で確認された誓願の祈りや取引の祈りは、口語的な祈りに含まれる可能性があるが、誓願の祈りや取引の祈りが祈りの言葉に着目した分類であるのに対し、口語的な祈りは複数の概念から構成され、神との対話を伴う祈りとして定義されていることから、具体的にどのような祈りが行われているかは示されていない。そのため、祈りの内容を分類した研究と異なる祈りの側面に着目した分類研究との関連性を検討していくことは、さまざまな宗教や一般の人々の間で実践されている祈りをより明確にすること、一貫性のある祈りのタイプの構成要素を特定することにつながる。

ほとんどの祈りの分類研究は、個人の祈りのタイプを特定するための尺度開発に焦点が当てられていた。しかし、今後は尺度の作成にとどまらず、測定された祈りのタイプと宗教的対処法など他の心理的概念との関連にも着目することで、祈りのタイプの特徴を広く捉えることを可能とし、実証的研究への応用を促進させると考えられる。

宗教の中核的行為としての祈りから個人の祈りを対象にすることが求められる中で、さまざまな祈りの側面や祈りのタイプが区別され、検討されている。しかし、祈りの分類研究では、3つの点において問

題がある。1つ目は、ほとんどの研究が、教会への出席率や聖書を読む頻度など単一の項目で祈りを分類している点である。祈りは多次元的な概念であり、単一の項目から特徴を明らかにすることは困難である。また、祈りの分類研究では、祈りの頻度の測定が一貫して行われていたが、研究によって回答方法が異なっていたため、同じ祈りのタイプを示しているにもかかわらず、同じレベルで祈りのタイプを測定することはできない。

2つ目は、上述の研究では、キリスト教信者が対象者の大半を占め、人格神の存在や信仰心があるという前提をもとに研究されてきたことである。そのため、質問項目をキリスト教信者に当てはめることはできるが、キリスト教以外の宗教者や一般の人々に適用することができるかは明らかではない。客観的に祈りを測定するためには、特定の宗教から離れた質問項目を作成すること、さまざまな属性の人々を対象にすることが重要である。

3つ目は、祈りの分類の尺度開発に焦点が当てられていることである。個人の祈りのタイプを測定するだけでなく、それを実証的に検討することで、特定の祈りのタイプと精神的健康との関係や祈りの個人差を明らかにすることができる。また、祈りの分類研究の問題である分類結果に一貫性がないことについて、項目に複数の概念が混在していることや分析のレベルが異なることが指摘されているが (Ladd & Spilka, 2002)、対象者の属性や方法に偏りがあることも影響していると考えられる。しかし、そのような違いを超えても一貫して示されている祈りのタイプに着目し、それを実証的に検討していくことが必要である。これらの問題点にアプローチし、実態に即した分類を進めることで、個人の祈りのタイプを明確に特定できるだけでなく、祈り手に生じる効果を説明することが可能となる。

### 引用文献

- Brandon L. Whittington (2007). An examination of the relationship between prayer and subjective well-being. Eastern Illinois University the Keep. (pp.4-52) Master of arts in clinical psychology.
- 袋本 久美子・阿部 晋吾 (2023). 祈りの言葉の分類— Locus of control との関連に着目して— 宗教／スピリチュアリティ心理学研究, 1, 40-50.
- Haerpfer, C., Inglehart, R., Moreno, A., Welzel, C., Kizilova, K., Diez-Medrano J., Lagos, M., Norris, P., Ponarin, E., & Puranen, B. (2022). Round seven – Country-pooled datafile version 4.0. Madrid, Spain & Viena, *World values survey*, <https://doi.org/10.14281/18241.18>
- Heiler, F. (1918). *Das Gebet*. München: Ernst Reinhardt Verlag. (ハイラー, J.F. 深澤 英隆 (監修) 丸山 空大・宮嶋 俊一 (訳) (2018). 祈り 国書刊行会)
- Heiler, F. (1958). *Prayer* (S. McComb, Ed. and Trans.) Galaxy Books. Oxford University Press. New York. (Original work published in 1932)
- Inglehart, R. F. (2020). Giving up on god: The global decline of religion. *Foreign Affairs*, 99, 110-118.
- Inglehart, R., Miller, J., Dennis, M., Jwo, S., & Rosta, Gergely. (2021). Religion's sudden decline, revisited. *World values survey*, Retrieved December 2, 2023 from <https://www.worldvaluessurvey.org/WVSEventsShow.jsp?ID=421>
- 鎌原 雅彦・樋口 一辰・清水 直治 (1982). Locus of Control 尺度の作成と信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307. [https://doi.org/10.5926/jjep1953.30.4\\_302](https://doi.org/10.5926/jjep1953.30.4_302)
- 小林 利行 (2019). 日本人の意識や行動はどう変わったか—ISSP 国際比較調査「宗教」・日本の結果から— NHK 放送文化研究, 69, 52-72. [https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190401\\_7.pdf](https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190401_7.pdf) (2023年9月29日閲覧).
- Kevin S. M., & Glen I. S. (2007). Prayer and Health: Review, Meta-Analysis, and Research Agenda. *Journal of Behavioral Medicine*, 30, 329-338.
- Ladd, K. L., & Spilka, B. (2002). Inward, outward, and upward: cognitive aspects of prayer. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 476-484.
- Laird, S. P., Snyder, C. R., Rapoff, M. A., & Green, S. (2004). Measuring private prayer: Development, validation, and clinical application of the multidimensional prayer inventory. *The International Journal for the Psychology of Religion*, 14, 251-272.
- McKinney, J. P., & McKinney, K. G. (1999). Prayer in the lives of late adolescents. *Journal of adolescence*, 22, 279-290.
- McCullough, M. E., & Larson, D. B. (1999). Prayer. In W. R. Miller (Ed.), *Integrating spirituality into treatment: Resources for practitioners* (pp.85-110). Washington, DC: American Psychological Association.
- Newman D. B., Nezelek, J.B., & Thrash, T. M. (2023). The dynamics of prayer in daily life and implications for well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1-15.

- Pargament, I. K., Koenig, H. G., & Perez, L. M. (2000). The many methods of religious coping: Development and initial validation of the RCOPE. *Journal of clinical psychology, 56*, 519-543.
- Poloma, M. M., & Pendleton, B. F. (1989). Exploring types of prayer and the quality of life. *Review of Religious Research, 31*, 46-53.
- Poloma, M. M., & Pendleton, B. F. (1991). The effects of prayer and prayer experiences on measures of general well-being. *Journal of Psychology and Theology, 19*, 71-83.
- Pratt, J. B. (1930). *The religious consciousness*. MacMillan, New York.
- Selim, M. A. (2001). Effect of pre-instruction on anxiety levels of patients undergoing magnetic resonance imaging examination. *Eastern Mediterranean Health Journal, 7*, 519-525.
- Smith, G. A. (2021). About three-in-ten U.S. adults are now religiously unaffiliated. Pew Research Center. <https://pewresearch.org/religion/2021/12/14/about-three-in-ten-u-s-adults-are-now-religiously-unaffiliated/> (September 30, 2023).
- 棚次 正和 (1998). *宗教の根源—祈りの人間論序説—*世界思想社
- Whittington, B. L. & Scher, S. J. (2010). Prayer and subjective well-being: An examination of six different types of prayer. *The international journal for the psychology of religion, 20*, 59-68.

#### 利益相反

著者全員がいかなる利益相反もないことを表明する。

#### 著者紹介

袋本久美子 現在、関西大学大学院博士課程前期課程在籍中。日本心理学会、関西心理学会、宗教

心理学研究会各会員。祈りの効果が生じるメカニズムに関心があり、祈りの言葉などに着目し、既存の理論を応用して心理科学的視点から検討している。

阿部 晋吾 関西大学社会学部教授。2005年関西大学大学院研究科修了、博士(社会学)。梅花女子大学講師、准教授、教授を経て、2019年より現職。専門は社会心理学で、怒りや叱りが人間関係に及ぼす影響に関する研究を主に行う。著書に『支えあいからつながる心』(編著、ナカニシヤ出版)、『読んでわかる社会心理学』(共著、サイエンス社)、『Big Five パーソナリティ・ハンドブック』(編著、福村出版)など。

Correspondence concerning to this article should be addressed to Ms. Kumiko Fukuromoto at k991712@kansai-u.ac.jp

#### 要旨

これまで、祈りの研究では、さまざまな祈りのタイプが存在することが示され、その大要が明らかにされてきた。しかし、これらの祈りの分類研究では、分類の基準や方法が異なるといった問題がある。そのため、さまざまな分類が混在し、各分類で共通して報告されている祈りのタイプやそれぞれの祈りのタイプの特徴などに一貫性がないままに研究が進められている。そこで、分類の基準として利用される祈りの内容に着目し、これを分類することに焦点を当てた研究を整理し比較した。その結果、すべての分類で嘆願の祈りが確認された。それぞれの分類の類似性や差異性が明らかとなり、祈りの心理的効果とメカニズムの解明を促進することに寄与する可能性がある。

キーワード：祈りの分類、祈りのタイプ、嘆願の祈り

